

# 小学校音楽科の学力に関する研究 (2)

—音符, 休符, 記号等の理解—

## A Study of the Academic Ability of Music in Elementary Schools (2)

— Focusing on Understanding of the Notes, the Rests, and the Music-signs —

次世代教育学部学級経営学科 吉富 功修

YOSHITOMI, Katsunobu

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

広島大学大学院教育学研究科 三村 真弓

MIMURA, Mayumi

Graduate School of Education

Hiroshima University

**キーワード** : 小学校音楽科, 学力, 音符・休符・記号の理解

**Abstract** : In Japan, the purposes and contents of music education are ambiguous than in many developed countries such as England and Germany where GCSE and Abitur examinations are conducted respectively.

In this article, we discussed on the academic ability of music education at elementary schools of Japan, especially from the viewpoint of understanding of the notes, the rests, and the music-signs. 2,187 fresh students of 22 junior high schools, 669 students of 11 high schools, and 919 students of 12 junior colleges or universities were investigated, and the following results were obtained.

1. The correct answer rates of bar line, ending line, and tempo signature were very low.
2. The correct answer rates of notes, rests, and dynamics signature were relatively high.
3. The correct answer rates of students who had received only music education of elementary schools are lower than those of students who had experienced more than that.
4. Almost all elementary schools in Japan had not been instructed systematically on the notes, the rests, and the music-signs.

**Keywords** : Music education of elementary schools, Academic ability, Understanding of the notes, the rests, and the music-signs

### I はじめに

我々は, 前年度の本学紀要に, 「小学校音楽科の学力に関する研究 (1) - 音符, 休符, 記号等の理解 -」 (以下, 「研究1」) を発表した。しかし, そのデータは, 4つの国立大学附属中学校の新入生から得られたものであった。したがって, ある意味で, かなり特殊なデータであった可能性も考えられる。さらに, 対象者数も, 350名弱と相対的に少数であった。

本年度は, より調査対象を拡大し, 前年度の中学生に加えて, 高等学校の生徒, 短大・大学 (以下, 大学) の学生をも対象者として, 下記の調査を行った。このうち, 1) と 4) は「研究1」とまったく同一の内容であり, 2) と 3) は本年度に新しく加えられたものである。調査内容は, 以下であった。

- 1) 音符, 休符, 記号等および和音記号
- 2) 簡単な階名
- 3) 小学校学習指導要領・音楽科に記載されている歌唱共通教材24曲を小学校の音楽の授業で習ったかどうか
- 4) 音楽に関する調査: 音楽・音楽の授業の好き嫌いに関する調査と音楽的な習い事・音楽の部活の経験の有無

本論では, 上記の調査について, 音符, 休符, 記号等および和音記号に関する理解と, それらの理解が小学校時代の音楽の授業以外での音楽的な習い事や音楽活動の経験者(以下, 経験有群)と無経験者(以下, 経験無群)とではどのように異なっているか, さらに, 中学生と高校生と短大生・大学生(以下, 大学生)とではどのように異なっているか, について考察する。

## Ⅱ 調査の概要

### 1. 調査の時期

調査は, できるだけ1学期の最初の音楽の授業時間に音楽室で一斉に行われた。ただし, それが無理な場合には, 上記の1) 2)に関連する内容を避けた授業を行い, 可能な限り早く実施した。

### 2. 調査の内容

1) 音符・休符・記号等の調査は以下のように構成された。

- ・組, 番号, 氏名の記入欄。
- ・「この調査は, 成績とは関係ありません。」の記述。
- ①名称を回答するもの13問: 5線, 全音符, 2分音符, ♩, ♪, 4分休符, 8分休符, ♪, ♪, 終止線, 縦線, 加線, 反復記号。
- ②名称と意味を回答するもの18問: *f*, *mf*, *mp*, *p*,  $\frac{2}{4}$ ,  $\frac{4}{4}$ ,  $\frac{3}{4}$ ,  $\frac{6}{8}$ , ♯, ♭, ♮, タイ, スラー, ♩=96, <, >, ♪, ♪。
- ③和音記号4問: IV, I, V, I。
- ④高音部譜表, 4小節間のA<sub>3</sub>からB<sub>5</sub>の階名: 17問。

これらの内容はすべて, 小学校学習指導要領・音楽科に明記されているものであり, その意味で, 小学校音楽科の学力として規定することに, なんら問題はな

2) さらに, 小学校学習指導要領・音楽科で歌唱共通

教材として指定されている24曲の曲名と冒頭の歌詞がそれぞれ示され, 小学校の音楽の授業で習った曲に○をつける調査(本研究では対象としない)。

3) 音楽に関する調査。

①音楽は好きですか: 5段階評定

②音楽の授業は好きですか: 5段階評定

③中学校入学以前に, 音楽の授業以外に, 音楽の習い事や音楽の部活・学校外での活動をしましたか。

はいと答えた人は, 習い事や部活・活動の種類, 何歳〜何歳, 年数を回答。

### 3. 調査対象

上記のすべての調査に関するデータを得た対象者を表1に示す。

表1 調査対象者

校 種	校数	経験無	経験有	合計
中 学 校	22	1,313	874	2,187
高等学校	11	328	341	669
大 学	12	356	563	919
合 計	45	1,997	1,778	3,775

これらのすべての調査についてデータを得られた3,775名について, 分析を行う。なお, 実際の調査では, 小学校学習指導要領・音楽科に記載されている音符, 休符, 記号等そのものを用いた(論文末の別紙を参照のこと)。しかし, 文中, 図中では, 日本語表記を用いる。

## Ⅲ 調査の結果

### 1. 音符, 休符等の経験有無別・校種別の正答率

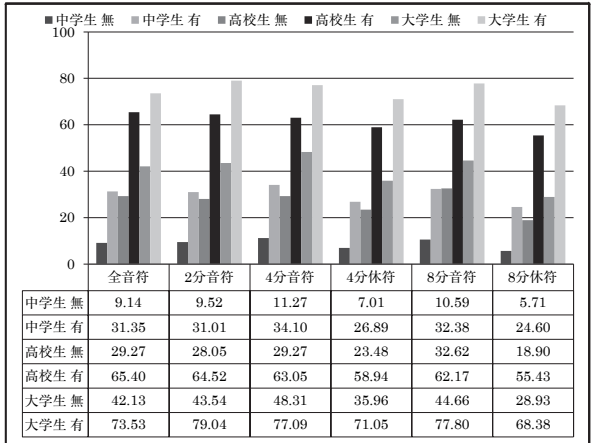


図1 音符, 休符の経験有無別・校種別の正答率

音符と休符の名称に関しては、正答率は10%弱から80%の範囲であった。経験の有無別では、すべての音符と休符で、経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。項目別では、4分音符>8分音符>2分音符>全音符>4分休符>8分休符、であり、楽譜での出現頻度に対応していると考えられる。

2. 楽譜に関する記号の経験有無別・校種別の正答率

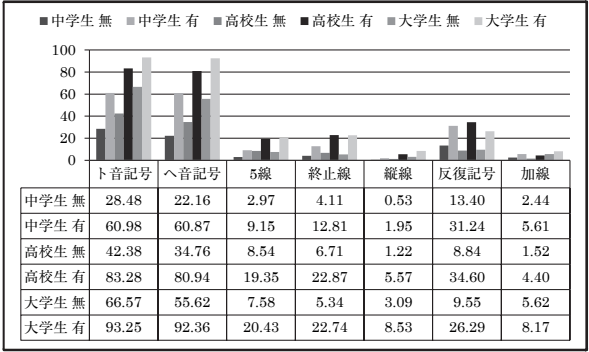


図2 楽譜に関する記号の経験有無別・校種別の正答率

楽譜に関する記号では、2つの音部記号とそれ以外の5つの記号とでは、まったく様相を異にしていた。2つの音部記号は、相対的に正答率が高く、22%から93%であった。それ以外の5線、終止線、縦線、反復記号、加線は、正答率が非常に低く、10%以下の項目も多かった。特に、縦線については、ほとんどの対象者がその名称を知らなかった。加線、5線、終止線も同様であるが、反復記号だけは、正答率が若干高かった。その理由は後述する。経験の有無別では、すべての項目で、経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。

3. 拍子記号の経験有無別・校種別の正答率

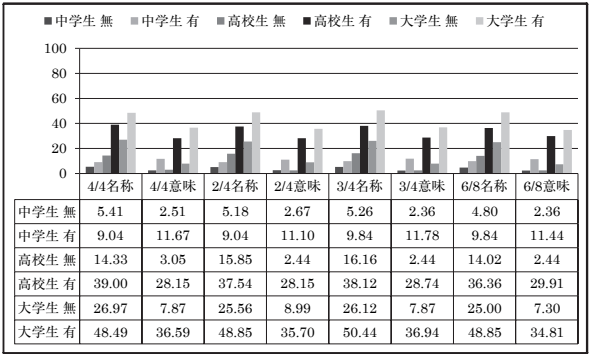


図3 拍子記号の経験有無別・校種別の正答率

拍子記号に関しては、4つの拍子記号に大きな正答

率の差はなかった。中学生有群では、すべての拍子で名称よりも意味の正答率が高かったが、高校生と大学生では両群とも、すべての拍子で意味よりも名称の正答率が、約10ポイント高かった。校種別では、ほぼ大学生>高校生>中学生、であった。

4. 強弱記号の経験有無別・校種別の正答率

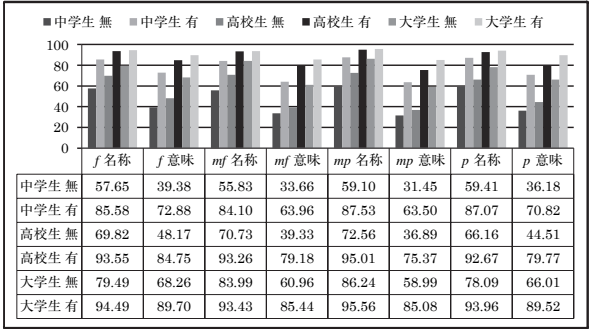
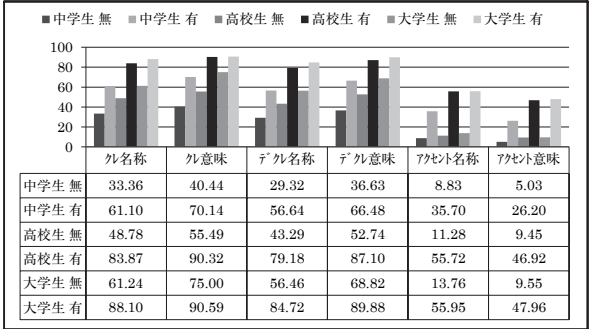


図4 強弱記号の経験有無別・校種別の正答率

強弱記号に関しては、正答率は、他の記号等よりも正答率が高かった。その理由は後述する。経験の有無別では、すべての項目で経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。名称の正答率が、意味の正答率よりも高かった。

5. その他の強弱の記号の経験有無別・校種別の正答率



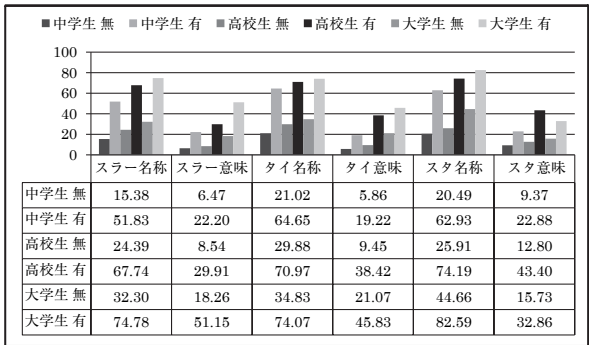
(クレ=クレシェンド、デクレ=デクレシェンド)

図5 その他の強弱の記号の経験有無別・校種別の正答率

その他の強弱の記号に関しては、クレシェンドとデクレシェンドの正答率が高く、アクセントの正答率が低かった。前者の正答率は、10%から90%であり、後者の正答率は、5%から55%であった。クレシェンドとデクレシェンドでは、名称よりも意味の正答率が若干高く、アクセントでは、名称の正答率が高かった。経験の有無別では、経験有群の正答率が高かった。校

種別では、大学生>高校生>中学生、であった。

6. 滑らかさの記号の経験有無別・校種別の正答率



(スタ=スタッカート)

図6 滑らかさの記号の経験有無別・校種別の正答率

滑らかさの記号に関しては、正答率は、5%から75%であった。これらの記号では、名称の正答率が顕著に高かった。その理由は後述する。経験の有無別では、経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。

7. 音高の記号の経験有無別・校種別の正答率

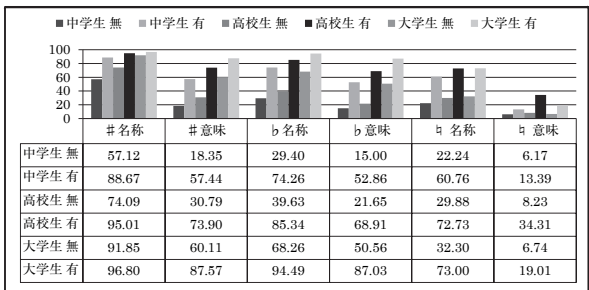


図7 音高の記号の経験有無別・校種別の正答率

音高の記号に関しては、#>b>ナチュラル、の順に正答率が低下しており、特に、ナチュラルの意味の正答率が低い。「もとの音の高さに戻す」の「高さ」が欠落し、「もとに戻す」と誤答した回答が多かったためである。経験の有無別では、経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。

8. 速度記号の経験有無別・校種別の正答率

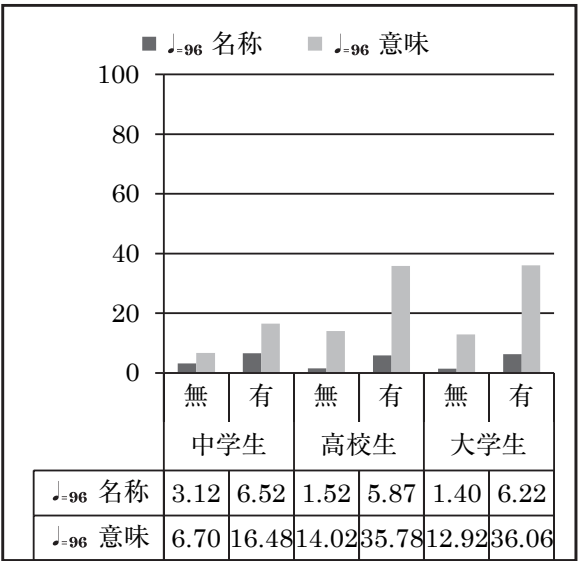


図8 速度記号の経験有無別・校種別の正答率

速度記号という名称は、ほとんどの対象者が認識していなかった。大学生の経験有群でも正答率は、6%であった。一方、その意味は、若干ではあるが正答率が高くなり、中学生の経験無群の7%弱から、大学生の経験有群の36%まで、分布している。

9. 和音記号の経験有無別・校種別の正答率

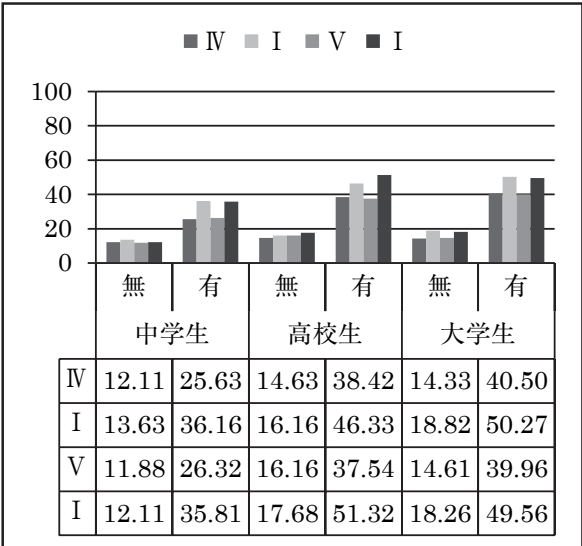


図9 和音記号の経験有無別・校種別の正答率

和音記号に関しては、正答率は10%から50%であった。経験の有無別では、すべての校種で、経験有群の正答率が高かった。校種別では、大学生>高校生>中学生、であった。



## 10. 階名の経験有無別・校種別の正答率

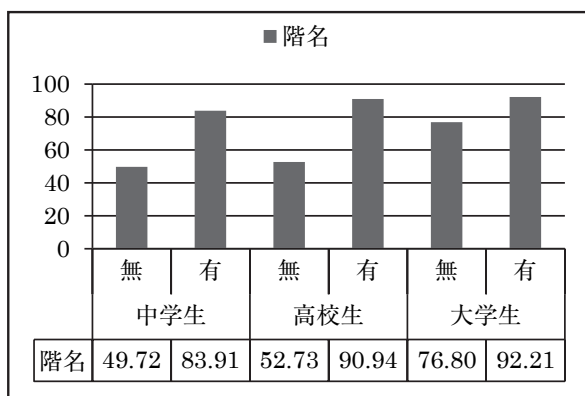


図10 階名の経験有無別・校種別の正答率

階名は、調子記号のない高音部譜表で示された、 $A_3$ から $B_5$ までの、全部で17問の4分音符と8分音符に階名を記入する問題であった。経験無群の正答率は、中学生50%、高校生53%、大学生77%であった。階名を記入して答えるという、非常に簡単なはずの問題であったが、中学生と高校生で約50%、大学生でも約25%の対象者が正答できていなかった。

全17問の階名のうち、正答率が低かったものは、全員を込みにすると $B_5$  (65.19%)、 $A_5$  (66.61%)、 $A_3$  (67.78%)であり、すべて5線外の音高の階名であった。一方、正答率が高かったものは、 $E_4$  (80.24%)、 $C_4$  (79.54%)、 $A_4$  (79.32%)であり、すべて5線内の音高の階名であった。 $C_4$ という音高は、一般的に特殊な音高であり、多くの歌唱調査などでは、正答率が高い。しかし本調査では異なる結果となった。 $C_4$ の正答率が最も高くなかった要因は、最も正答率が高い $E_4$ が冒頭から第2番の音であり、 $C_4$ は最後の第17番の音であったためである。最後まで集中力を持続できなかった対象者が若干みられたのであろう。

## IV 考 察

### 1. 経験の有無別の検討

本研究で重要なことは、小学校の音楽の授業で、前述したような認知的な内容が、確かな学力として、すべての学習者に獲得されているかどうかを明らかにすることである。前述したように、調査の一環として、小学校時の音楽的な習い事や音楽の部活・活動の有無に関する調査を行ったのも、このような視点からであった。したがって、考察の主たる対象は、中学生の経験無群の正答率である。中学生の経験有群は、小学校の音楽の授業での学習に加えて、音楽の習い事や部

活などでの学習の結果が、今回の調査の正答率に大きく反映しているからである。さらに校種別では、高校生の対象者はすべて選択必修教科・芸術で音楽を選択した生徒であり、大学生の対象者はすべて教員養成・保育士養成系の学生であり、当然、小学校卒業後に、さらなる音楽の学習を継続してきた者がほとんどであると考えられる。彼らの今回の調査から、小学校での学習の結果だけを明らかにすることは、困難だからである。したがって、以下では、主として、中学生の経験無群について検討する。

### ①音符・休符

図1は、全音符、2分音符、4分音符、4分休符、8分音符、8分休符について示している。中学生の経験無群の正答率は、4分音符の11.27%が最も高く、8分休符の5.71%が最も低い。中学生の経験無群の約90%の生徒がこれらの音符と休符を正しく記述できなかったことになる。一方、これらの音符と休符の中学生の経験有群の正答率は、4分音符が34.10%、8分休符が24.60%であり、いずれも約20ポイント有群が高い。

### ②楽譜に関する記号

図2は、ト音記号、ヘ音記号、5線、終止線、縦線、反復記号、加線について示している。中学生の経験無群の正答率は、ト音記号28.48%とヘ音記号22.16%では、20%を超えているが、5線2.97%、終止線4.11%、縦線0.83%、反復記号13.40%、加線2.44%である。ト音記号とヘ音記号の正答率は、まずまずであるが、後者の5つの記号の正答率は極めて低迷している。その理由は、ト音記号とヘ音記号を正しく認識することは、歌唱や演奏にとって非常に重要であるが、後者の5つの記号はかならずしもそうではない。ただ、反復記号だけは、正しく認識していないと、歌唱や演奏に支障をきたす。つまり、これらのことから、音符・休符・記号等は、それらを体系的に教授・学習されたのではなく、歌唱や演奏の活動の際にたまたま付随的に教授・学習されたのではないかと推測できるのである。中学生の経験有群の後者の5つの記号の正答率も低迷している。このことから、これらの記号を理解するためには、小学校での体系的な教授・学習が必要であると考えられる。

### ③拍子記号

図3は、4/4拍子、2/4拍子、3/4拍子、6/8拍子の、名称と意味について示している。中学生の経験無群の正答率は、4/4拍子の名称の5.41%が最も高く、3/4拍子の意味と6/8拍子の意味の2.36%が最も低い。このことから、中学生の経験無群の95%以上

の者が、拍子記号について理解していないことになる。中学生の経験有群の拍子記号の正答率も低迷している。②と同様な意味からも、小学校での体系的な教授・学習が必要である。

#### ④強弱記号

図4は、*f*, *mf*, *mp*, *p* の、名称と意味について示している。中学生の経験無群の正答率は、名称では60%弱、意味では30%から40%であった。今回調査した内容では、最も高い正答率であった。その理由は、小学校での表現活動において、これらの強弱記号に関する知識が必要不可欠であり、指導者からのこれらの強弱記号に関する発言の頻度も非常に多いために、自然に教授・学習されたのではないかと考える。

#### ⑤その他の強弱の記号

図5は、クレシェンド、デクレシェンド、アクセント、の名称と意味について示している。中学生の経験無群の正答率は、クレシェンドとデクレシェンドでは40%から30%であるが、アクセントでは低迷している。このことの原因も上記と同様であると考ええる。歌唱や演奏の表現活動で、指導者が発言する内容は、クレシェンドとデクレシェンドが、アクセントよりも非常に多いために、このような結果になったと考える。

#### ⑥滑らかさの記号

図6は、スラー、タイ、スタッカート、の名称と意味について示している。中学生の経験無群の正答率は、名称では21.02%から15.38%であるが、意味では9.37%から5.86%に低迷している。特に、タイの意味の正答率が低かった。このことも、表現活動で指導者が発言するのは、スラー、タイ、アクセントという名称であり、その意味にまで正確に言及することは少ないからであると考ええる。

#### ⑦音高の記号

図7は、*♯*, *♭*, *♮* の名称と意味について調査している。*♯* については、携帯電話やプッシュホンの操作に関連しているために正答率が高くなっている。それ以外の中学生の経験無群の正答率は、名称では高く、意味では低い傾向がある。特に、*♮* の意味の正答率は非常に低い。その原因は前述したが、表現活動では、「元に戻す」と理解していれば、「元の高さに戻す」と認識していなくても、ことは足りるのである。ここにも、体系的な教授・学習の必要性がある。

#### ⑧速度記号

図8は、速度記号の名称と意味について示している。本調査では、名称と意味について18項目調査しているが、名称よりも意味の正答率が高かったのは、この速

度記号だけであった。それにしても、正答率は非常に低迷している。中学生の経験無群の正答率は、名称が3.12%、意味が6.52%であった。

#### ⑨和音記号

図9は、和音記号について調査している。I, IV, Vのいずれかの和音記号を記入する問題であったが、中学生の経験無群の正答率は、13%から11%であった。この正答率は、チャンスレベル以下である。高校生や大学生の正答率も決して高くなく、和音に関する体系的な教授・学習の必要性がここにもある。

#### ⑩階名

図10は、階名について調査している。中学生の経験無群の正答率は、49.72%であり、全体的に見て、*f*や*p*などの強弱記号の次に位置している（シャープを除外する）。このことから、例えば、下第1線がドであることを認識し、そこから勘定すればド以外の階名（固定ド）を認識できる者がかなりいることになる。中学生の経験有群の正答率は、83.91%である。経験無群よりも24ポイントも高い正答率である。

## V 結 論

本研究で、これまでの小学校の音楽の授業では、音符・休符・記号等や和音記号に関する体系的な教授・学習がほとんど行われていないことが明らかになった。

その原因として、小学校学習指導要領・音楽科の記述がある。

第1に、音符・休符・記号等が、「内容」ではなく、「[共通事項]と「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」で記述されていることである。

第2に、そこでは、「身近な音符・休符・記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること」と記述されていることである。

第3に、「[「音符・休符・記号や音楽にかかわる用語」については、児童の学習状況を考慮して、次に示すものを取り扱うこと」と記述されていることである。

これらのために、表現活動のなかでよく言及される音符・休符・記号等についてはたまたま教授・学習されるが、表現活動ではあまり言及されないものについてはほとんど理解する機会がない、という実態の存在が推測される。これらの音符・休符・記号等は、体系的な教授・学習があつて初めて理解でき、それらを実際の表現活動において活用することによって定着するのである。

小学校の音楽教科書を見ると、前述の学習指導要領の記述もあってか、体系的な教授・学習には不適な掲載方法である。多くは、裏表紙の付近にまとめて掲載されている。そういう方法ではなくて、少なくとも、この内容・記号は、この教材（楽曲）で教授・学習する、といった掲載の方法が必要である。教材（楽曲）を優先して曲集のような体裁である現在の音楽教科書から脱して、この内容・記号を教えるためにこの教材を、という学習内容を優先した音楽教科書が必要である。

## 文 献



















- 1) 吉富 功修, 三村 真弓, 光田 龍太郎, 藤井 恵子, 桑田 一也, 松前 良昌, 増井 知世子, 原 寛暁, 2008, 「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1) - 中学校入学時の音楽学力の実態を中心として -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構 研究紀要』第36号, pp.155-163.
- 2) 吉富 功修, 三村 真弓, 青原 栄子, 上野 陽美, 緒方 満, 河邊 昭子, 福田 秀範, 森安 尚美, (協力者) 川口 さやか, 2006, 「聴唱力・視唱力を育成する音楽教育プログラムの開発(1) - エクササイズ/アプローチ・プログラムの検証 -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構 研究紀要』第34号, pp.389-398.
- 3) 吉富 功修, 三村 真弓, 青原 栄子, 緒方 満, 大橋 美代子, 河邊 昭子, 福田 秀範, 森安 尚美 2007, 「聴唱力・視唱力を育成する音楽教育プログラムの開発(2) - 聴唱法と視唱法の違いに着目して -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構 研究紀要』第35号, pp.159-168.
- 4) 吉富 功修, 三村 真弓, 2009, 「小学校音楽科の学力に関する研究(1) - 音符・休符・記号等の理解を中心として -」『環太平洋大学研究紀要』第2号, pp.85-94.

本論文は、科学研究補助金（基盤研究（C）（一般））「小学校音楽科における学力測定方法の開発」研究代表者：吉富 功修（課題番号：21536964）の研究の一環である。

（平成21年11月26日受理）

\*この調査は、成績とは関係ありません。

- 2 次の音符、休符、記号の名称と意味を書きなさい。

音符等	名 称	意 味	音符等	名 称	意 味
		⑭			⑮
		⑯			⑰
		⑱			⑲
		㉑			㉒
		㉓			㉔
		㉕			㉖
		㉗			㉘
		㉙			㉚
		㉛			㉜

3 次の楽譜に和音記号（I、IV、V）を記入しなさい。

和音記号：( )<sup>㉔</sup> ( )<sup>㉕</sup> ( )<sup>㉖</sup> ( )<sup>㉗</sup>

4 次の歌のうち、小学校の音楽の授業で習ったものに○を付けなさい。

5 次の楽譜を見て、音符の下の( )に階名を記入しなさい。

( ) ( ) ( ) ( )    ( ) ( ) ( X X )    ( ) ( ) ( ) ( X ) ( ) ( ) ( )